

全国のお菓子屋さんから献菓が届く、 日本の「お餅の神さま」は、なぜ近江に？



菓祖神を祀る菓祖神社は全国にいくつかあれど、

餅菓子や米菓のルーツとされる神社が

近江にあるってご存じでした？

毎年秋の祭りには全国から献菓が届く

大津市の小野神社。

そして、そのお祭りが「しとぎ祭」。

なぜ近江に？

小野妹子ゆかりの小野神社と餅菓子のつながりは？

その答えを求めて「しとぎ祭」の不思議を追いかけます。



藁づとにしっかりと包まれた「しとき」は納豆にも似ている。

日本のお餅も、餅つきも、近江にルーツがある？ 菓子業界が崇敬する「餅祖神」小野神社。



参道に「餅祖神」と刻まれた古い道標。昭和四年と刻まれている。

「しとき祭は」お餅の神さま」である小野神社ならぬはのもので、これだけは必ず十一月二日に行うことが習わしとなっている。近江に千二百年続いてきたといわれる、いやルーツはもっと古いかももしれない、しとき祭りなのだ。

だが、じつはまず取りあげるのは十一月二日のしとき祭ではない。じつはそれ先駆けて十月第三土曜日に、菓子業界が組織する小野神社奉賛会がしとき大祭を行っている。そこに集まる総勢百名近くは、近畿・東海一円の生菓子・餅菓子組合の役員たちと地元の諸役。そしてこの日のために、奉賛会メンバーだけでなく全国の菓子メーカー、製菓業者からおなじみのお菓子が献菓されている。

奉賛会に集う製菓業者は、この日のしときをいただき、一年間神棚や店先に捧げて菓子づくり・餅づくりに励むのである。

奉賛会半世紀の歴史

全国菓子業者による小野神社奉賛会が設立されたのは昭和四十五年のこと。つまり奉賛会の設立を記念して、社殿前に鏡餅がお目見えし

には関西一円に餅祖神信仰が浸透していたのだろうか。

菓子業界と銘菓献納式

小野神社には「しとき祭」という古い祭りが伝わっている。「ことわざ」は漢字で「糒」。広辞苑を引くと、糒（糒）とは「神前に供える餅の名」と載っている。



国道から離れ、いまは静かな小野神社。奈良西大寺の造営には小野神社の広大な森から木が伐り出されたという。

たことになる。設立から四十年、当時のことを知る人もすでにいない。だが古い資料を総合すると、昭和初期より菓子業界の祖神として京阪神および三重県の製菓業者に熱心に崇敬されてきたこと、古くから業界の人には知られていても、全国的には知名度がなかったこと、そこで当時の小野神社宮司(近江神宮宮司が兼任)と地元の人が尽力し「大阪、京都、三重、岐阜、滋賀各県の菓子業界の理解と協賛を得て奉賛会が結成された」ことが記されている。

奉賛会の古い記録には大阪、京都、東海、北陸から東京、北海道まで、さらには全国組織を含む関係団体の名称が並び、和菓子の神さまとして菓祖神社なども知られるが、こちらは餅を扱う生菓子、米菓、あられを中心に全国の和菓子業界に広がっていることがよくわかる。



小野一族発祥の地に小野妹子が祖神を祀ったのが小野神社。二基の鏡餅がシンボルだ。



小野妹子の墓である唐白山(からうすやま)古墳からの眺め。小野の里には古墳群や古代遺跡が多く、かつての栄華が偲ばれる。

古代の気配漂う 小野の里

では、遣隋使・小野妹子ゆかりの小野神社が、なぜお餅の神さまになったのだろうか。そして、しとぎ祭とは、いったいどんな祭りなのだろう。

社伝によれば、小野神社には天足彦国押人命と米餅搗大使主命の二神が祀られている。前者は日本書紀によると大和邇(迹)氏の祖でもあり、大和朝廷成立以前に現在の大阪京都、奈良、滋賀、三重、愛知にいたる広大な地域を統治した王族だった。

太陽を拜む 日の神信仰

しとぎ祭は、小野の十二人衆といわれる古風な宮年寄制によって支えられている。十月の奉賛会しとぎ大祭、十一月のしとぎ祭、いずれも前日にモチ米を浸し、当日朝に十二人衆が生モチ米を木臼と杵で「こづいて、すくって、にぎって」餅にし、藁づとに包む。



神社周辺に三カ所の祭場を設け、一年の月の数だけしとぎを吊り下げ、日の神に供える。通常12個、閏年は13個とここでは旧暦が健在だ。



しとぎ祭の神饌。なんとといっても中心はしとぎである。



11月2日、扉が開かれ、しとぎを供えて飾り付けされた小野神社本殿。



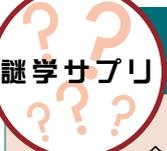
11月3日午後には小野妹子らに扮する遣隋使船とお神輿の行列が出て「小野妹子のふるさと和邇」が賑わい、しとぎ祭を締めくくる。

Profile) 文●黒田正子(くろだまさこ)

編集者・エッセイスト。京都人も知っていそうで知らない身近な「不思議」を追跡する『京都の不思議』『京都の不思議II』を出版。著書はほかに『京都語源案内』『それは京都ではじまった!』(いずれも光村推古書院)。

これが神にお供えする神饌であり、神前と同時に地区の三カ所にも、道の両側に青竹を立てて「しとぎ十二個(閏年には十三個)を天に捧げて吊るし、日の神を礼拝する。古い太陽信仰がここにある。これを地元では「田まひり」と呼んで「お田さんにお供えする」祭祀としてきた。儀式後の直会では、昔はしとぎの藁づとに火をつけ、藁の燃え尽きた頃にむっくりと焼き上げる餅とお神酒をいただいたそつだが、この焼き餅の風習は残念ながら見られなくなっている。

いままでここで祭りに神職が参加するが、しとぎ祭は神主の存在しない時代からのもので、地元の長老である十二人衆が代々古式にのっとり日の神を迎えてきた。しとぎ用のモチ米も藁も、神社境内の神田でその秋に収穫する。そういえば五月の御田植祭でも、日本の御田植祭の原型ではないかといわれる独特のスタイルが見られる。



日本列島各地に見られる 古式ゆかしい「しとぎ」の味 謎学サプリ

「しとぎ」は本来、神への神聖な供え物として全国的に分布している。九州では「しとぎ」といえば、米をついた餅、または米をついた米粉のこと。秋田、岩手、青森など東北の米どころには「豆しとぎ」「しとぎ餅」「しとぎ団子」といった郷土食が伝わっている。いずれも米の粒が残る程度についたつぶつぶ感が特徴で、餅でもない、まんじゅうでもない、それを「しとぎ」と呼ぶ。あぶったり、軽く油を引いて焼くのは信州の「おやき」とよく似ている。米をついて生のまま形にするのは、神饌には不浄火を嫌うため。

しとぎ祭が伝わるのは、埼玉県秩父地方の小鹿野町。「出原の天気占い」という古い弓矢神事とともに行われ、きなこ米で二層に作ったお供えの「おしとぎ」がふるまわれる。

「しとぎ祭」がなまって「ひとぎ祭」とは？
地元の人が昔からそう呼ぶのには理由がある。